

現象描写文における「のだ」に関する考察
—補足説明の観点から—

ANALYSIS OF “NODA” USED IN DESCRIPTIVE SENTENCE:
FROM THE PERSPECTIVE OF SUPPLEMENTARY EXPLANATION

大橋幸博, ヌエボレオン州立大学外国語学習センター

Yukihiro Ohashi, Centro de Estudios y Certificación de Lenguas Extranjeras (UANL)

1. はじめに

現象描写文における「のだ」の意味・機能に関して言及した研究は（野田, 1997; 田野村, 2002; 名嶋, 2007）があるが、様々に説明され、今だ確立しているとはいえない。（野田, 1997）は、突然予想もしない事態に遭遇した場合、また事態が話し手の目の前で成立した場合にも、「のだ」は用いられないとしている。（田野村, 2002）は、突発的に生じた事態や事態の兆候を認識して、直ちにそのことを言語化するような場合には、「のだ」は用いられないと述べている。

（名嶋, 2007）は、「のだ」の使用は、ある事態が既定として捉えられるか否かではなく、どのような形で関連性を持つかであると考えている。このように様々に説明されているが、筆者は「のだ」の本質的な意味・機能である補足説明の観点から、現象描写文における「のだ」の意味・機能を明らかできると考える。

そこで本稿では、現象描写文と現象描写文における「のだ」の違いを考察し、現象描写文における「のだ」を3つのタイプに分類する。また、現象描写文において「のだ」が用いられない場合も明らかにする。

2. 現象描写文・現象描写文における「のだ」とは

2.1 現象描写文

ここでは、まず現象描写文がどのような文であるか確認する。（仁田, 1991）によると、現象描写文とはある存在する現象をそのまま主観の加工を加えないで、言語表現化して述べ伝えたものであるとしている。また、無題文で文全体が新情報であると述べ、下記の（1）や（2）のような文は現象描写文であると述べている。

(1) 雨が降っている。

(2) あっ、隣りが火事だ。

（仁田, 1991, p.123-124）

また、現象描写文には下記の4つのタイプがあるとし、1が現象描写文の典型的で代表であると主張している。

- | | |
|----------------|----------------------|
| 1、現前状況を表す | ・ 子供が運動場で遊んでいる。 |
| 2、近接未来の徴候を表す | ・ あっ、荷物が落ちる。 |
| 3、過去の出来事を報道する | ・ 関東地方に大規模な地震が起きました。 |
| 4、現在有している予定を表す | ・ 明日会議がある。 |

（仁田, 1991, p.125, 127-130）

2.2 現象描写文における「のだ」

ここでは、現象描写文における「のだ」について述べる前に、まず「のだ」の形を確認する。(田野村,1986; 市川,2005)によると、「のだ」は下記に示すように様々な形を変える。

雨が降っている <u>のだ</u> 。	雨が降っている <u>のだ</u> 。
「のだ」の普通形	「のだ」の丁寧形
雨が降っている <u>んだ</u> 。	雨が降っている <u>のです</u> 。
雨が降っている <u>の</u> 。	雨が降っている <u>んです</u> 。

次に、現象描写文における「のだ」とは何か考察する。(野田,1997)は、対事的ムードの「のだ」(本稿における現象描写文の「のだ」のこと:以下、現象描写文の「のだ」と述べる)は、聞き手の存在を前提とせずに用いられるので、聞き手を意識した形「の・んです」などは用いられないとしている。

- (3) そうか、このスイッチをおすんだ。
- (4) *そうか、このスイッチをおすの。
- (5) *そうか、このスイッチをおすんです。 (野田,1997, p.68)

筆者も、この野田の考えに同意する。(野田,1997)では「んだ」は聞き手を意識していない形だと述べられているが、しかし、なぜ「んだ」という形なのかということは説明されていないので、下記の現象描写文である(6)と(7)を例にとり、もう少し詳しく見てみよう。

- (6) 雨が降ってるんです。
- (7) 雨が降ってるんだ。

まず、(6)の「んです」は「のだ」の丁寧形であり、(7)の「んだ」は「のだ」の普通形(丁寧ではない形)である。両者の構造的な違いは、助動詞の「です」と「だ」が違うという点のみである。「です」というのは、丁寧な表現で聞き手が目上の人などのときに用いられる。つまり、(6)は、話し手が丁寧に話さなければいけない実在する聞き手(目上の人・親しくない人など)がいて、その聞き手に対して言っている。一方、「だ」というのは、丁寧ではない表現で、聞き手が友達や自分自身など、話し手が丁寧に話す必要がない人のときに用いられる。この理由から、(7)は聞き手の存在を前提としていない、独り言であると考えられる。話し手は自分自身(聞き手)に対して言っているので、丁寧な表現「です」を用いる必要がなく、丁寧でない表現「だ」を用いている。

さて、現象描写文の「のだ」は独り言の際に用いられるのだが、話し手の近くに聞き手がいる場合でも用いられることがある。例えば、次の(8)のような場合である。

- (8) (ある建物から先に A が出て)
 A: あっ、雨降ってるんだ。
 B: えっ、うそー！傘持ってない。

この場合、一見話し手 A の近くに聞き手 B がいるので、A が B に対して言っているように見えるが、実際 A は B に対して言っているのではなく、自分自身（聞き手）に対して言っているのである。ただ、独り言であっても、聞き手 B には聞こえるので、聞き手 B は話し手 A に対して反応することがある。

以上、現象描写文と現象描写文の「のだ」について考察した。また、本稿で対象とする現象描写文の「のだ」というのは、仁田の分類の 1 にあたる現前状況を表す現象描写文で、「のだ」が「んだ」の形をとるもの、また聞き手の存在を前提としないものである（独り言）。本稿では、紙枚制限のため、仁田の分類の 2・3・4 にあたる現象描写文については取り扱わない。

3. 先行研究とその問題点

この章では、現象描写文における「のだ」に関する 3 つの先行研究を考察し、その問題点について論じる。

3.1 (野田, 1997)

(野田,1997) は、現象描写文において「のだ」が用いられない場合は 2 つのパターンがあると述べている。まず 1 つめパターンは、突然予想もしない事態に遭遇した場合は、(10) のような「のだ」文ではなく、(9) のような単なる現象描写文が用いられるとしている。

- (9) 「あっ！ ゴキブリが死んでる」
 (10) 「あっ！ #ゴキブリが死んでるんだ」 (野田,1997, p.81)

筆者は、この野田の考えについて異議を唱える。なぜなら、例えば下記の (11) のような文は、野田の言う、突然予想もしない事態に遭遇した場合であるが、「のだ」文を用いることができるからである。

- (11) (午前中、図書館で勉強をしていて、昼過ぎに図書館を出る際に。天気予報で今日は一日晴れると聞いていたのに)
 ・あっ！雨降ってるんだ。

(野田,1997) は、2 つめのパターンは、事態が目の前で成立した場合も、(13) のように「のだ」文ではなく、(12) のように単なる現象描写文が用いられると述べている。

- (12) (ぎりぎりで電車に乗り遅れて)
 あー、間に合わなかった。

(13) #あー、間に合わなかったんだ。 (野田,1997, p.81)

筆者は、この考えについても疑問を抱く。なぜなら、例えば下記の(14)のような文は、野田の言う、事態が目の前で成立した場合であるが、「のだ」文を用いることができるからである。

(14) (スマートフォンの電池の残量を見ずに、友達と話しているとき、突然画面が真っ暗になり、電源を入れようとしても起動しない)
・あれ。あー、電池切れたんだ。

また、(野田,1997)は、現象描写文と現象描写文の「のだ」文と、どちらも用いられる場合には、次のような違いがあると指摘している。(15)の現象描写文は雨が降っているという目の前の事態をそのまま述べているが、(16)の「のだ」文は、気づく前から既に雨が降っているという事態が存在していたと話し手が捉えている。

(15) あ、雨が降ってる。
(16) あ、雨が降ってるんだ。 (野田,1997, p.81)

この両者の違いについても、筆者は疑問を抱く。例えば、下記の(18)は野田の考えであると、気づく前から既にゴキブリが死んでいるという事態が存在していたと、話し手が捉えているということになるが、果たしてそうだろうか。気づく前から既にそのような事態が存在していたと話し手が捉えている場合に、わざわざ(18)のような文を発話するだろうか。また、なぜ(9)や(10)は突然予想もしない事態に遭遇した場合とのみ捉えられ、(15)や(16)はそう捉えられないのか。野田における「のだ」の使用基準は、明確ではなさそうである。

(17) あっ！ゴキブリが死んでる。
(18) あっ！ゴキブリが死んでるんだ。

3.2 (田野村, 2002)

(田野村,2002)は、突発的に生じた事態や事態の兆候を認識して、直ちにそのことを言語化するような場合には「のだ」は用いられないとし、下記の(19)や(20)などを例に挙げている。

(19) あれっ、{財布がない／?ないんだ}。
(20) しまった。傘を忘れて {来た／?来たんだ}。 (田野村,2002, p.28)

田野村は上記のように説明しているが、筆者はこの考えについて異議を唱える。なぜなら、例えば(19)であれば、あれっ何かがないと感じ、それが財布であると認識した場合に、「あれっ、あー、財布がないんだ。」と言えそうだからであ

る。また (20) であれば、何かを忘れて来たなあと考えていて、それが傘であると気づいた場合には (20) の文は言えそうである。つまり、田野村における「のだ」の使用基準もあまり明確ではないように思われる。

3.3 (名嶋, 2007)

(名嶋,2007) は文脈の改変が「のだ」の選択に関わっていると考える。文脈の改変とは、事態知覚をきっかけとして話し手が何らかの文脈を呼び出し、その知覚した事態が文脈を改変させることにより関連性を有した場合に、「のだ」が用いられると述べている。名嶋は、関連性の観点から下記の (21) と (22) を次のように説明している。まず、(21) は話し手の車であり、その緊急性ゆえに事態の知覚の時点で十分な関連性を持つため、知覚した事態を更に文脈と関連づけることは通常はないので、「のだ」の許容度は低くなると指摘している。一方、(22) は、他人の車であり、車が傾いている事態を因果関係で捉えなおした事態認識や意外性を持つ事態認識が、文脈を改変する命題として関連性をもちうるので、「のだ」が用いられると主張している。

(21) (傾いた自分の車を見て)
あ、パンクしている。 / #あ、パンクしているんだ。

(22) (傾いた他人の車を見て)
あ、パンクしている。 / あ、パンクしているんだ。

(名嶋,2007, p.121)

筆者は、この名嶋の考えに疑問を抱く。まず、関連性を有するか有さないかということだが、そもそも、この関連性という考えが「のだ」の本質的な意味ではないと考える。また、上記の (21) と (22) の場合、自分の車であっても、他人の車であっても、「のだ」文が言えそうである。例えば、傾いた車を見て、何かおかしいかと車をチェックしていて、その際に原因がおそらくパンクであろうと気づいた場合、(21) と (22) と両方とも言えるので、名嶋における「のだ」の使用基準もあまり明確ではなさそうである。

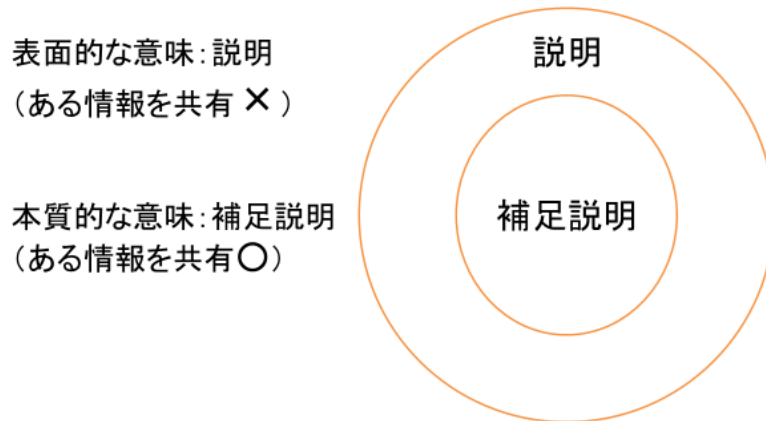
以上、先行研究とその問題点を論じた。その結果、先行研究では、現象描写文における「のだ」の使用基準があまり明らかになっていないようである。

4. のだの意味・機能

先行研究では、「のだ」の意味・機能は、説明・強調・和らげ・発見・前置き・非難・調和・推測と様々に説明されている (久野,1973; 寺村, 1984; Alfonso,1989; McGloin,1989; 野田, 1997; 菊地, 2000; 名嶋, 2007)。本稿では、紙枚制限のため、これらの先行研究について詳しくは述べないが、(Ohashi, 2015) で「のだ」の意味・機能が上記の先行研究の説明では説明しきれないこと、また「のだ」の本質的な意味についても詳しく述べているので、参照してもらいたい。

さて、「のだ」の意味に関してだが、筆者は「のだ」は下記の図1のように、表面的な意味と本質的な意味があると考え。例えば、話し手と聞き手がある情報を共有していない場合は、説明する必要があるので、表面的な意味である説明が表れる。一方、話し手と聞き手がある情報を既に共有している場合は、説明する必要がないので、本質的な意味である補足説明が表れる。

図1 「のだ」の意味



では、それぞれのケースを見ていこう。例えば、下記の(23)は、表面的な意味である説明の場合である。(23)では、話し手Bと聞き手Aはある情報(聞き手Aが旅行で沖縄に行くこと)を共有していないので、表面的な意味である説明が表れ、話し手Bは聞き手Aに説明を求めている。

(23)

(ゴールデンウィーク初日に、駅でスーツケースを引くAさんを見かけて)

B: Aさん! どこか旅行に行くんですか?

A: はい、ちょっと沖縄に。

次に、下記の(24)や(25)のように、本質的な意味である補足説明が表れる場合をみる。(24)では、Bが「ハワイに行く予定。」と言った後、AとBはある情報(Bがハワイに行くこと)を共有しているにもかかわらず、AはBに「ハワイに行くんですか?」と説明を求めている。この場合は、補足的な説明を求めていると考えられる。

(24) A: Bさん! 冬休み何するんですか?

B: ハワイに行く予定。

A: ハワイに行くんですか?

B: うん。前から行きたくて。

また、下記の (25) では、A と B はある情報 (B がお酒が好きではないこと) を共有しているにもかかわらず、B は A に「お酒が好きじゃないんです。」とお酒が好きではないことを再度説明している。この場合も、補足で説明をしているので、補足説明をしていると考えられる。

(25) (一か月前、B は A にお酒が嫌いであるということを行った。今日、A と B と C は一緒に夕食を食べ、その後 C は A と B をバーに誘った。その時、A は B に尋ねた)

A: 私はバーに行きますけど、B さんはどうしますか。

B: やめておきます。お酒が好きじゃないんです。

5. 現象描写文における「のだ」の3タイプ

ここでは、「のだ」の表面的な意味である説明や、本質的な意味である補足説明の観点から、現象描写文における「のだ」を3つのタイプ A・B・C に分類する。

5.1 現象描写文における「のだ」タイプ A

タイプ A とは、ある事態を認識する際、その事態が話し手にとって明確で (解釈は1つしか考えられない)、普通は自分自身 (聞き手) に説明する必要がないが、自分自身 (聞き手) にその事態を説明すべき何かしらの前提がある場合は「のだ」が用いられる。

(26) (朝起きて、カーテンを開けたら)

・あ、雨降ってるんだ。

上記の (26) は、タイプ A である。(26) では、ある事態 (雨が降っている) は話し手にとって明確で、雨が降っているという解釈しかできない。そして、その事態は明確なので、通常はその事態を自分自身 (聞き手) に説明する必要がない。しかし、例えば、前提として、今日遠足がある・今日バーベキューをする予定がある、などがあれば、「のだ」が用いられる。このタイプ A を用いれば、下記の野田の先行研究で問題となった「のだ」文を説明できそうである。

(16) あ、雨が降ってるんだ。

(野田,1997, p.81)

5.2 現象描写文における「のだ」タイプ B

タイプ B とは、ある事態を認識する際、その事態が話し手にとってあまり明確でなく、その事態に関して、話し手は話し手なりに解釈し断定した内容を自分自身に説明する場合も「のだ」が用いられる。また、このタイプ B を用いれば、下記の野田・田野村・名嶋の先行研究で問題となった「のだ」文を説明できそうである。

- (10) 「あっ！#ゴキブリが死んでるんだ」 (野田,1997, p.81)
- (20) しまった。傘を忘れて {来た／?来たんだ}。 (田野村,2002, p.28)
- (21) (傾いた自分の車を見て)
あ、パンクしている。／ #あ、パンクしているんだ。
(名嶋,2007, p.121)

では、上記の文をそれぞれ見ていこう。まず (10) では、話し手はある事態（ゴキブリが死んでいる）を認識する際、その事態はあまり明確ではなく（何か黒い物がある）、そして、話し手はおそらくゴキブリだろうと断定し、自分自身に説明していると考えられる。タイプ B は、話し手は話し手なりに解釈し断定するので、「あっ！ゴキブリが死んでるんだ」と言った後、よく見ると違い、「あー、なんだ、ただのゴミか。」といったこともありえる。次に (20) では、話し手はある事態（傘を忘れて来た）を認識する際、その事態はあまり明確ではなく（何か忘れて来た）、そして、話し手はおそらく傘だろうと断定し、自分自身に説明していると考えられる。最後に (21) では、話し手はある事態（車がパンクしている）を認識する際、その事態はあまり明確ではなく（車が傾いている）、そして、話し手はおそらくパンクだろうと断定し、自分自身に説明していると考えられる。

5.3 現象描写文における「のだ」タイプ C

タイプ C とは、ある事態を話し手は既に認識しているが、その事態に関して話し手が話し手自身を納得や再度認識させるために、「のだ」を使い再度説明する。つまり、補足説明の場合である。下記の (27) や (28) は、タイプ C である。

- (27) (広場の人ばかりを見て、今日は何かあるんだと認識し、その1時間後に、またその広場を通りかかった)
・あっ、やっぱり今日何かあるんだ。
- (28) (注目されていなかったサッカーチームが優勝したのを新聞で知って)
・あのチームが優勝？すごいなあ、優勝したんだ。

では、上記の文をそれぞれ見ていこう。まず (27) では、話し手は一時間前に広場を通り、今日は何かあると認識したにもかかわらず、その後また広場を通った際に「あっ、やっぱり今日何かあるんだ。」と「のだ」を用い、自分自身に再度説明している。これは、話し手が話し手自身にその事態を納得や再度認識させるために、「のだ」を使い補足説明していると考えられる。次に (28) では、話し手は注目されていなかったサッカーチームが優勝したのを新聞で知り、既にそのチームが優勝したのを知っているにもかかわらず、「すごいなあ、優勝したんだ。」と「のだ」を用い、自分自身に再度説明している。これも、話し手が話し

手自身にその事態を納得や再度認識させるために、「のだ」を使い補足説明していると考えられる。

以上、「のだ」の表面的な意味である説明や、本質的な意味である補足説明の観点から、現象描写文における「のだ」を3つのタイプ A・B・C に分類した。そして、この分類を使えば、先行研究で問題となっている「のだ」文も説明できるように思われる。

6. 現象描写文において「のだ」を用いることができない場合

ここでは、「のだ」の表面的な意味である説明や、本質的な意味である補足説明の観点から、現象描写文において「のだ」を用いることができない場合を明らかにする。

現象描写文において「のだ」を用いることができない場合とは、話し手がある事態を認識する際、その事態が話し手にとって明確で（解釈は1つしか考えられない）、説明すべき何かしらの前提がない場合、話し手は聞き手（自分自身）に説明する必要がないので、「のだ」は用いられない。下記の(30)は、「のだ」が用いられない場合である。

（一人で車を運転していて、遠くに熊がいる）

(29) あっ、熊だ。

(30) *あっ、熊なんだ。

上記の文では、(29)は言えるが(30)は言えない。(30)では、話し手はある事態（遠くに熊がいて、誰が見てもその動物が熊であること）を認識する際、その事態（熊であること）が話し手にとって明確で、加えて説明すべき前提がないので、「のだ」が用いられない。また、この考えを用いれば、野田の先行研究で問題となっている下記の文を説明できる。

(13) #あー、間に合わなかったんだ。

（野田,1997, p.81）

上記の(13)では、話し手はある事態（目の前でドアが閉まり、電車に間に合わなかったこと）を認識する際、その事態（間に合わなかったこと）が話し手にとって明確で、加えて説明すべき前提がないので、「のだ」が用いられないと考えられる。

以上、現象描写文において「のだ」が用いられない場合を説明した。そして、筆者の考えに基づけば、先行研究で問題となっている「のだ」文も説明できるように思われる。

7. まとめ

本稿では、まず現象描写文における「のだ」とは一体何なのかを明らかにし、また先行研究における問題点を指摘した。そして、「のだ」の表面的な意味である説明と本質的な意味である補足説明の観点から、現象描写文における「のだ」

を3つのタイプ(A・B・C)に分類した。考察した結果、現象描写文における「のだ」とは、話し手が目の前に存在する事態を「のだ」を用い、話し手自身(聞き手)に説明する文で、「んだ」の形をとるものである。そして、タイプAとは、ある事態を認識する際、その事態が明確であるが、説明すべき何かしらの前提があるので、「のだ」を用い説明する場合である。タイプBとは、ある事態を認識する際、その事態があまり明確でない場合、話し手は話し手なりに解釈し断定した内容を「のだ」を用い説明する場合である。タイプCとは、ある事態を話し手は既に認識しているが、話し手が話し手自身を納得や再度認識させるために、「のだ」を用い、再度説明する補足説明の場合である。また、現象描写文において、ある事態が話し手にとって明確で、説明すべき何かしらの前提がない場合は、話し手は聞き手(自分自身)に説明する必要がないので、「のだ」は用いられない。

今後の課題としては、実際に日本語学習者が本稿で分類した3タイプをどのように理解しているか、また、現象描写文において「のだ」を用いることができない場合をどのように理解しているか調査する必要がある。

参考文献

- 市川保子 (2005) 『初級日本語文法と教え方のポイント』スリーエーネットワーク
- 久野すすむ (1973) 『日本語文法研究』大修館書店
- 菊地康人 (2000) 「『のだ(んです)の本質』」『東京大学留学生センター紀要』10, 25-51.
- 田野村忠温 (1986) 「命題指定の『の』の用法と機能：諸説の検討」『言語学研究』5, 85-120.
- 一 (2002) 『現代日本語の文法I - 「のだ」の意味と用法』和泉書院
- 寺村秀夫 (1984) 『日本語のシンタクスと意味 第2巻』くろしお出版
- 名嶋義直 (2007) 『ノダの意味・機能—関連性理論の観点から』くろしお出版
- 仁田義雄 (1991) 「現象描写文をめぐる」『日本語のモダリティと人称』ひつじ書房 第2版, 113-134.
- 野田春美 (1997) 『の(だ)の機能』くろしお出版
- Alfonso, Anthony. (1989). Japanese Language Patterns: a structural approach vol.I fourth edition. Tokyo: Sophia University.
- McGloin, Naomi HANAOKA. (1989). A Students' Guide to Japanese Grammar. Tokyo: Taishuukanshoten.
- Ohashi, Yukihiro. (2015). An analysis of the misuse of Japanese grammar *noda* and how to teach *noda* effectively. Unpublished MA dissertation, The University of Greenwich.